

【総説】

看護領域で Subjective Well-being に焦点をあてた文献からみえてきた

概念と今後の展望

Subjective Well-being in the Field of Nursing; Review of Literatures

梶原江美 福岡看護大学 看護学部看護学科 基礎・基礎看護部門
中村加奈子 福岡看護大学 看護学部看護学科 健康支援看護部門
末永陽子 福岡看護大学 看護学部看護学科 健康支援看護部門

抄 録

【緒言】看護の質を考えるうえで、その人らしい生活をめざすことが重要とされている。その人らしい生活を考える重要な概念として well-being がある。well-being は、1980 年代より研究が行われており、様々な側面から well-being について論じられてきた。特に subjective well-being において大坊は、「well-being は生活の適応の指標であり、目標にもなりえるものである」と述べており、その人らしい生活をめざすことを支援する看護職にとって、well-being は看護の質を測る概念としても重要であると考えられる。

【研究目的】看護領域における subjective well-being に焦点をあてた文献について整理し、その概念の理解および今後の展望について検討する。

【研究方法】文献データベースは Pub Med を用いて文献の収集を行った。検索式は“nursing”and “SWB”とした。検索された文献から subjective well-being に焦点を当てた文献を抽出し、報告年、対象者、内容を整理した。

【結果】検索式で出された文献は 35 件だった。その中で subjective well-being に焦点を当てた文献は 8 件だった。報告年を 5 年ごとに見ると 2000～2005 年は 2 件、2006～2010 年には 3 件、2011 年以降は 3 件の推移だった。SWB 評価の対象は、介護者 1 件、高齢者 3 件、入院患者 1 件、医療系学生 1 件、中学生 2 件だった。

【考察】研究対象者が多岐にわたっていることから、特定の分野に特化せずに主観的な well-being を評価するうえで活用範囲の広い尺度である可能性がうかがわれた。最初の論文が 2002 年であることから比較的新しい概念であること、報告数は少ないものの継続して論文が出されていることが確認された。今後も動向を追いつつ、well-being の有用性について示唆を得ていく。

キーワード：well-being subjective well-being 看護 文献

緒 言

well-being は社会学の中で発展してきた概念である。自分の住むあるいは属する社会が豊かで安定したものであることを願い、満足でき、生きがいを得られるよう well-being という概念の下、多様な研究が行われてきた。

この研究を進めるにあたり課題となるのは、類似する概念である QOL との違いを整理することである。

Kahneman ら¹⁾が『Well-being』という書籍の中で、関連概念のレベルを整理している。「The good life」という個人が捉える人生における最

高の幸福という文化レベルを最上位に位置づけ、その下位概念として、well-being と QOL を同レベルに位置付けている。さらに well-being の下位概念として、持続的気分、さらにその下位概念に一時的感情と現時点での快や不快を位置付けているのである。well-being を中心に整理すると、文化と社会的文脈の中で well-being を多次元的な概念と捉え、人生の評価に関与する要因として位置づけられ、感情的充実感、心理的充実感、社会的充実感として測定されている。

大坊²⁾は、「well-being は生活の適応の指標であり、目標にもなりえるものである」と述べており、その人らしい生活をめざすことを支援する看護職にとって、well-being は看護の質を測る概念としても重要であると考え。また、well-being を主要概念とした研究において、spiritual well-being、social well-being、subjective well-being の3側面から行われている。本稿では、Kahneman ら¹⁾が『Well-being』の中で使用し、人の生活のあらゆる側面の全体的な評価を指す subjective well-being を選択し、看護領域における subjective well-being に焦点をあてた文献を概観し、看護における subjective well-being の概念の理解と今後の展望について検討する。

研究目的

看護領域における subjective well-being に焦点をあてた文献について整理することで、これまでの研究成果から subjective well-being の概念の理解および今後の展望について検討する。

研究方法

本研究は、看護領域における subjective well-being に焦点をあてた研究について、文献データベースを用いた文献検討である。検索には、Pub Med を使用した。Pub Med は、米国国立医学図書館(NLM : National Library of Medicine)にある国立生物科学情報センター (NCBI : National

Center for Biotechnology Information) が作成し、生命科学系関連文献を 2300 万件以上収録している世界でも最大規模の文献データベースである。看護論文は生命科学系雑誌に分類、投稿されることが多いため広く文献を収集するのに適していると考えた。文献検索の実施時期は、2017 年 8 月である。検索方法は、検索年は指定せずに Title/Abstract に「nursing」「SWB」の検索語が入る文献とし、検索式は“nursing”and “SWB”とした。検索語を「SWB」としたのは、文献によって subjective well-being の他に spiritual well-being、social well-being などの尺度も存在するため、まずは広く文献検索し、抄録で概要を確認したのちに subjective well-being を抽出することで漏れなく文献検索することができる判断したからである。以上の条件で検索された文献から subjective well-being に焦点を当てた文献のみを抽出し、文献の報告年、研究対象者、研究内容について整理をし、研究者間で研究の動向を確認した。

倫理的配慮

本研究は、対象がヒトを対象とする研究ではなく、文献が対象であるため、倫理審査を受審していない。しかし、文献の抽出および整理するにあたっては、特定の文献に偏らないこと、著者の意図を損なわないように忠実に抽出し、分析を行った。

結 果

1. 文献検索の結果

検索式で抽出された文献は、35 件だった。しかし、35 件の中には、spiritual well-being、social well-being の言葉の頭文字をとって「SWB」として使用されている文献や subjective well-being に焦点が当てられていない文献が存在していたため、それらの文献は除外した。また、言語が英語以外で書かれている文献は翻訳上の課題があり 1 件を除外した。最終的に分析対象となった文献は 8 件だった (図 1)。

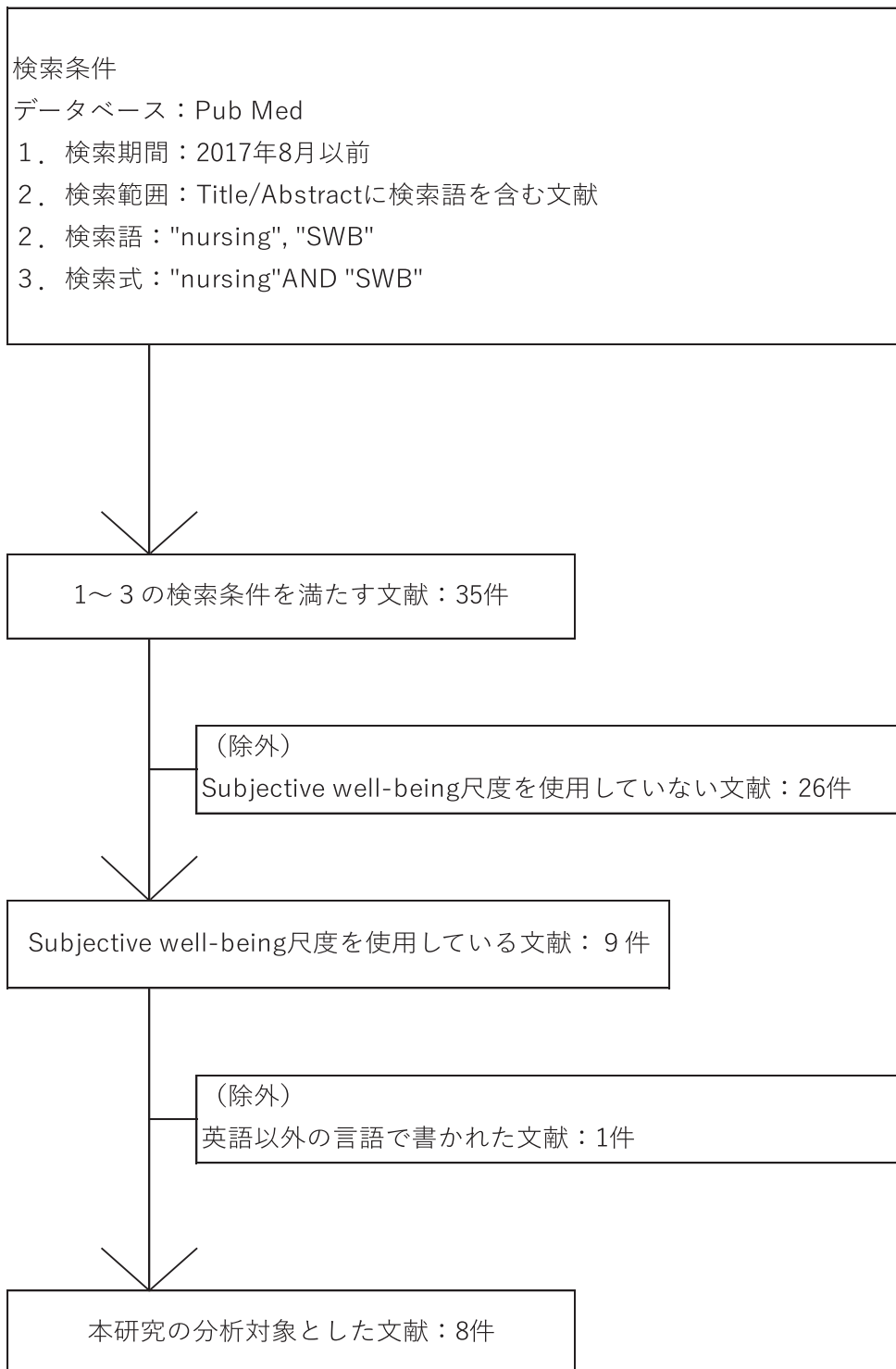


図 1. 分析対象文献の抽出

2.看護領域における subjective well-being に焦点をあてた研究の動向（表 1）

対象文献の報告年は 2002 年から 2017 年にかけて報告されていた。5 年ごとの推移は、2000～2005 年は 2 件、2006～2010 年は 3 件、2011 年以降は 3 件で推移していた。

研究対象は、発達障害者の家族介護者 1 件、高齢者 3 件、慢性疾患の入院患者 1 件、医療系学生 1 件、中学生 2 件だった。

Camel³⁾ らは、1,000 人以上の高齢者に調査をして AMOS を用いて概念モデルを分析した結果、健康についての自己評価/Lewin らの

functional limited scale を用いた機能評価（以下、健康/機能）が subjective well-being に直接的に最も高く影響を及ぼしていることを明らかにした。また、健康/機能、社会的サポート、健康サービス満足度、コーピングパターンとして目標の再設定と将来のケアニーズへの期待、具体的な計画が 70%程度影響していると報告していた。

Zhao ら⁴⁾は、subjective well-being にはレジリエンスや peer caring が関係すると考え、看護学生と医学生を対象に各尺度を用いて調査を行っている。その結果、看護学生と医学生共に subjective well-being は 2 年生で最も低く、3 年生が最も高い結果で、レジリエンスや peer caring についても同様の結果だった。また、subjective well-being への影響は、看護学生と医学生共にレジリエンスと peer caring に関係しており、レジリエンスは peer caring に弾力的に仲介の役割を果たすとし、学生の subjective well-being を高めるためには、学生のレジリエンスと peer caring への働きかけが必要である可能性を示唆していた。

Werner ら⁵⁾は、自閉症や知的障害、身体障害をもつ家族介護者を対象に調査をしている。その結果、対象者の subjective well-being は低く、特に自閉症を持つ家族で最も低かったと述べている。そして、subjective well-being と関連が強いものとして自尊感情や社会的サポートを挙げており、自閉症を持つ家族への長期的な働きかけの重要性を明らかにしていた。

Zhang ら⁶⁾は、慢性呼吸器疾患や糖尿病などの慢性疾患患者を対象に subjective well-being と不安に関する調査を実施している。重回帰分析の結果、subjective well-being の影響因子として状態-特性不安尺度 (STAI) を用いた不安が 24.9%と影響力の大部分を占め、自己評価式抑うつ尺度 (SAS) と医療費の支払い方法の 3 因子で 31.2%の影響があることを示唆していた。

Zhang ら⁷⁾が 60 歳以上の高齢者を対象に

行った調査では、Campbell らの IWB (index of well being) 尺度を用いて subjective well-being を検討している。ロジスティック回帰分析の結果、subjective well-being は教育水準、社会的サポート、健康状態、収入によって説明されるとし、介入の基本モデルを示唆していた。

Chalise⁸⁾らは、ネパールでのフィールド調査の中で Kathmandu 地方に 60 年以上在住する高齢者に社会的サポートのリソースと併せて孤独感や subjective well-being について聞き取り調査を実施している。それによると、対象者は孤独感が高く subjective well-being が低い状況であると述べた。そして、ネパールの高齢の男性は、配偶者からサポートを受けて別居している子供にサポートをすることで subjective well-being が高まることを示唆し、性別にかかわらず、別居している子供にサポートができることはそうでないのと比べて、subjective well-being が 1.3 倍高いことを明らかにした。

Rask ら^{9) 10)}は、フィンランドの中学生を対象に思春期の subjective well-being を調査している。2 つの文献共に 38 項目から構成されている Berne questionnaire of subjective well-being/youth (BSW/Y) を使っている。BSW/Y は、satisfaction (22 項目) と ill-being (16 項目) から構成されている。この他に subjective well-being に関する知識と行動を併せて調査している。重回帰分析の結果、satisfaction の影響因子として、生徒の落ち着きの高さ、生徒の相互関係の高さ、男性 (性別)、家族に深刻な問題がないことが 61%を占めていた⁹⁾。同様に ill-being の影響因子として、混乱、女性 (性別)、家族の深刻な問題、親との関係性の悪化、家族の深刻な病気が挙げられた¹⁰⁾。性別ごとに satisfaction の影響因子を分析した結果、女子も男子も共に学校生活への満足度が最も影響していた他、自己の体への満足度や自己評価による健康度がいずれも挙がっていた。男子では飲酒も関係していた¹⁰⁾。

Year	Title	Author	Journal	Purpose	Methods	Conclusion
2017	Health, coping and subjective well-being: results of a longitudinal study of elderly Israelis.	Carmel S, Reuviv WH, O'Rourke N, Tovell H	Aging Ment Health. 2017 Jun;21(6):616-623.	The aim of this study was to test a conceptual model designed to promote the understanding of factors influencing subjective well-being (SWB) in old age. Within this framework, we evaluated the relative influences on elderly Israelis' SWB of health and/or function, personal resources, coping behaviors (reactive and proactive), and changes in all of these factors over time.	[Materials.] 1216 randomly selected elderly persons (75+) were interviewed at home and 1019 one year later in Israel. [methods.] Interview [analyses.] Statistical analyses. The conceptual model was evaluated using Structural Equation Modelling (SEM) analysis using AMOS 18.	Personal resources and use of appropriate coping behaviors enable elderly people to control their well-being even in the presence of DIF. Evidence-based interventions can help older people to acquire and/or strengthen effective personal resources and coping patterns, thus promoting their SWB.
2016	Subjective well-being and its association with peer caring and resilience among nursing vs medical students: A questionnaire study.	Zhou F, Guo Y, Sunonen P, Lano-Klita H	Nurses Educ Today. 2016 Feb;37:108-113.	This study examined the effects of peer caring and resilience on SWB as well as the mediating and moderating effects of resilience in the relationship between peer caring and SWB.	[Materials.] 426 nursing students and 336 medical students. [methods.] Questionnaires [analyses.] Statistical analyses.	Peer caring and resilience improved the SWB of both nursing students and medical students. In addition, resilience improved SWB through peer caring for both nursing students and medical students, and higher resilience in medical students enhanced the positive effects of peer caring on SWB. Therefore, educators should promote peer caring and resilience in order to improve students' SWB.
2013	Subjective well-being among family caregivers of individuals with developmental disabilities: the role of affiliate stigma and psychosocial moderating variables.	Werner S, Shulman C	Res Dev Disabil. 2013 Nov;34(11):4103-14.	only scant research has examined the association between family caregivers' internalization of stigma (affiliate stigma) and their subjective quality of life (subjective well-being, SWB). Furthermore, studies have rarely examined this association via comparison between caregivers of individuals with different developmental disabilities in addition to examining the influence of psychosocial protective factors.	[Materials.] 176 Family caregivers of individuals with autism spectrum disorders (ASD), intellectual disabilities (ID), and physical disabilities (PD). [methods.] Questionnaires [analyses.] Statistical analyses	Results showed that SWB of family caregivers was below the average normative level and especially low for caregivers of individuals with ASD. The strongest predictors of SWB were caregivers' self-esteem, social support, positive meaning in caregiving, and affiliate stigma. Furthermore, an interaction was found between affiliate stigma and diagnosis, showing that among caregivers of individuals with ASD, greater levels of stigma were associated with lower ratings of SWB, whereas such an association was not found among caregivers of individuals with ID or PD. Findings from this study point to the need for interventions that address the role of affiliate stigma, improve social support and self-esteem and improve SWB. Further, findings point to the need to respond differentially to the various developmental disabilities.
2009	A study on the subjective well-being and its influential factors in chronically ill inpatients in Chianasha, China.	Zhang JP, Yao SQ, Yu M, Huang HS, He GP, Leng XH	Angel Nurs Res. 2009 Nov;22(4):250-7.	The aim of this paper is to assess the subjective well-being of chronically ill inpatients to know which its influential factors are, what the significant predictors of SWB are, and what we can do in nursing care.	[Materials.] 200 inpatients with chronic respiratory diseases, diabetes, and cardiovascular diseases in China. [methods.] Questionnaires [analyses.] Statistical analyses	It was shown that these patients' subjective well-being was lower than that of the general population. Using ANOVA, Pearson correlations, and multivariate stepwise regression analysis, trait anxiety, anxiety, and means of payment were found to significantly influence subjective well-being. Interventions targeting trait anxiety, anxiety, and means of payments, such as paying more attention to individuals' psychological symptoms, implementing more cost-effective treatment or caring, and establishing positive relationship with patients are necessary to improve inpatients' subjective well-being.
2008	Factors influencing the subjective well-being (SWB) of elderly depressed adults in an economically depressed area of China.	Zhang JP, Huang HS, Ye M, Zeng H	Arch Gerontol Geriatr. 2008 May; Jun;46(3):335-47. Epub 2007 Jul 5.	While the majority of older persons in China live in rural areas, the majority of older persons in Shanghai, Suzhou, Nanjing, and Beijing live in urban areas. China, and is particularly lacking as regards those who reside in remote areas. The present study investigated 360 elderly individuals in an economically depressed area of Hunan, China.	[Materials.] 360 elderly individuals in an economically depressed area of Hunan in China. [methods.] Questionnaires [analyses.] Statistical analyses	The results of ANOVA showed correlations between income, level of education, social support, and SWB. The results of stepwise regression analysis demonstrated that education, income and social support showed unique and significant effects in predicting SWB, whereas the SPH approached significance. It was further demonstrated through pathway analysis that income and SPH directly predicted SWB, whereas education did so indirectly. These results suggest that the low SWB of elderly individuals in economically depressed areas of China could be improved through some interventions addressing the economic status, health and education. More specifically, a systematic approach to improve public health services available to the elderly in poor and remote areas of China.
2007	Relationship specialization amongst sources and receivers of social support and its correlates with loneliness and subjective well-being: a cross sectional study of Nepalese older adults.	Chalise HN, Saito T, Takahashi M, Kai I	Arch Gerontol Geriatr. 2007 May; Jun;44(3):299-314. Epub 2006 Aug 28.	The purpose of this paper is to identify the relationships significant in social support (received (SSR) and provided (SSP)) and analyze their connections with loneliness and SWB. The subjects, not suffering from dementia, were 60 years and above living in Kathmandu city.	[Materials.] The subjects, not suffering from dementia, were 60 years and above living in Kathmandu city, Nepal. [methods.] field survey (door to door interview) [analyses.] Statistical analyses	The data was analyzed using logistic regression with some confounding variables controlled. The results indicate that loneliness is high and SWB is low amongst Nepalese older adults. SSR from children living together and SSP to spouse, children living together and friends and neighbors reduce loneliness. SSP to children living apart increases SWB-life satisfaction. SSR from children living together and SSP to children living together and apart increases SWB-life stability. However, SSP to relatives reduces SWB-life satisfaction and SSR from relatives reduces SWB-life stability in Nepalese older adult men.
2003	Adolescent subjective well-being and family dynamics.	Rask K, Astedt-Kurki P, Paavilainen E, Laipala P	Scand J Carinng Sci. 2003 Jun;17(2):129-136.	The purpose of this study was to examine the relationships between adolescent subjective well-being (SWB) and family dynamics perceived by adolescents and their parents.	[Materials.] 239 pupils (51% female) from seventh and ninth grades, and one of their parents. [methods.] Questionnaires [analyses.] Statistical analyses	Results indicated that parents assessed family dynamics better than did their adolescent child. Furthermore, there was no association between family dynamics perceived by adolescents and family dynamics assessed by one of their parents or between the perceived SWB and family dynamics assessed by one of their parents. Regression analysis indicated that certain aspects of family dynamics perceived by adolescents related to adolescent global satisfaction and ill-being. Specifically, adolescents' perception of high level of mutuality and stability in the family as well as male gender and lack of serious problems in family were predictors of adolescent global satisfaction. Furthermore, disorganization in the family and poor parental relationship perceived by adolescents, being female, serious problems and illness in family predicted a high level of adolescent global ill-being.
2002	Relationships among adolescent subjective well-being, health behavior, and school satisfaction.	Katja R, Pajari AK, Merja-Liisa T, Pekka L	J Sch Health. 2002 Aug;72(6):243-9.	This study examined the relationship among subjective well-being (SWB), school satisfaction, and health behavior of Finnish secondary school students (N = 246).	[Materials.] 509 Pupils (51.0% female) in seventh and ninth grades from 13 secondary schools in Finland. [methods.] Questionnaires [analyses.] Statistical analyses	Results indicated that school satisfaction, body satisfaction, and self-rated good health explained 30% of the variance in global adolescent satisfaction. In addition, the observed amount of high-intensity drinking which explained 31% of the variance. The most significant associations for global ill-being for females were school dissatisfaction, high-intensity drinking, and self-rated moderate health, explaining 34% of the variance. In global ill-being, the variables of body dissatisfaction and regular drinking explained only 1.4% of the variance for boys. The results support the need to enhance adolescent positive attitudes toward life and school, self-perception, and adolescent coping with negative emotions.

考 察

本研究では、対象の8文献を概観した。

対象文献の報告年は2002年から2017年にかけて報告されていた。報告年を5年ごとに見ると2000～2005年は2件、2006～2010年には3件、2011年以降は3件で推移していた。最初の論文が2002年であることから比較的新しい概念であること、報告数は少ないものの継続して論文が出されていることが確認された。

次に研究対象者別に観てみると、研究対象国は、イスラエル2件、中国3件、ネパール1件、フィンランド2件であった。また、研究対象者は、発達障害者の家族介護者1件、高齢者3件、慢性疾患の入院患者1件、医療系学生1件、思春期の中学生2件であり、研究対象者が多岐にわたっている。

研究内容別に文献を概観してみると、共通点として、対象者のwell-beingを高めるための支援の検討を目的としている点である。例えば、発達障害者の家族介護者を対象とした研究では、発達障害者の家族介護者のsubjective well-beingと心理社会的影響要因を明らかにすることを目的としている。その結果、介護者の自尊心、社会的サポート、介護における積極的な意味がsubjective well-beingに影響しており、家族介護者の社会支援や彼らの自尊心を向上するような永続的なサポートの重要性が明らかとなった。

高齢者を対象とした研究においても目的として、老年期でのsubjective well-beingへの影響要因や理解を促進するための概念モデルの試みが挙がっていた。さらに、対象者を経済的低迷地域の高齢者に限局した報告や孤独感への影響など心理面に焦点を当てて報告されているものがあった。この3件の高齢者を対象とした研究での共通した知見として、高齢者への介入には効果的な人的サポートが特にsubjective well-beingに影響することが示唆されていた。これらの結果から、我が国の高齢社会の中で各個人がより自分らしい生活を目指し、それを支援する看護を考える上では、

人的サポートの充実を社会的にどう整備していくか、また、インフォーマルな人と人とのつながりも重要となることを再認識する機会となった。

医療系学生を対象とした研究では、看護対医学学生の主観的福祉とその同僚へのケアリング、レジリエンスとの関連に着目してsubjective well-beingを検討していた。ケアリングもレジリエンスも近年、注目されるキーワードであり、それらとsubjective well-beingとの関係に着目した報告は新鮮であった。この研究の知見として、教育者はsubjective well-beingを改善するためにピアケアリングとレジリエンスを促進する必要性が示唆されており、看護教育の中にかにに取り入れていくかが今後の課題となる。

思春期の中学生を対象とした研究では、subjective well-beingと家族のダイナミクスや健康行動、学校への満足度との関係に着目して報告していた。そして、これらの研究の知見として、生活や学校に対する思春期の積極的な態度、自己認識、および負の感情への対処の必要性が示唆されていた。思春期の発達を踏まえ、前向きな積極的な態度だけに目を向けるのではなく、負の感情に対していかに介入し対処するかについて、周囲と連携をとることが重要になると考える。

本研究結果から、今回の文献から得られた知見は国や年齢による違いはなく、対象者のwell-beingを高めるためには、社会的サポートや人的サポートなどの外的サポートが重要であることが示唆されていた。外的サポートを構築し、外的サポートの充実を図るためにも、看護の対象となるその人が外的世界をどのように受け止めているかについて、価値観を含め関心を持ち、その人に必要なサポートを考えていくことが必須となることを再確認できた。また、本研究の結果から、今後のsubjective well-beingの研究対象は特定の分野、年齢に限定されず実施することが可能であり、さらなる研究の積み重ねが重要であることが明らかとなった。

一方で、今回の結果はどれも海外での研究報告であった。この知見を日本において活用していく中で注意を払わなければいけない点について、上出¹⁾は「日本における well-being を高める動機づけ」の中で2点述べている。1点目は、well-being は個人的なレベルのみで解釈されるものではなく、個人と社会の両方の視点を考慮しなければ、well-being の本来の意味を理解したことにならないという点である。2点目は、欧米で示された知見をそのまま検討するだけでなく、文化的背景を考慮する必要がある。この2点の指摘は、well-being の知見を活用する上で重要な点であり、特に対象者の生活・人生を支援する看護職として重要な視点であると考ええる。そのため、今後の well-being、subjective well-being の研究を行う際は、個人と社会の両方の視点と、文化的背景を考慮した分析が必要であり、その点を踏まえた研究や支援に関する示唆が得られることが望まれる。

以上より、subjective well-being は、研究対象者の生活において、特定の分野、また年代に特化せずに主観的な well-being を評価するうえで活用範囲の広い尺度である可能性がうかがわれた。今後も動向を追いつつ、well-being の有用性について示唆を得ていく。

本研究の限界と課題

本研究の対象文献は、量的研究デザインの研究が多くみられていた。そのため、subjective well-being に関して概観できる範囲が限定されていた。今後は質的研究のものが行われていないか、またその研究内容等について確認をしていくことが必要であると考ええる。

また、今回の対象文献においては、subjective well-being の定義を定めて使用している文献と、定義には触れずに使用している文献とがみられていた。また多くの文献において定義を定めていない状況であったため、今後 subjective well-being の概念定義についても検討が必要であり、概念認識のずれがない

状況で尺度を用いていく必要があると考える。

結 論

1. Pub Med で検索した結果、subjective well-being に関連した文献は8件で、いずれも海外での報告であった。
2. subjective well-being に関する研究は、新しく取り組み始められたテーマである。
3. subjective well-being の研究対象は、特定の分野、年齢に限定されず実施されていた。

尚、本論文は、開示すべき COI 関係にある企業・組織および団体等はない。

引用文献

1. Daniel Kahneman, Ed Diener, Norbert Schwarz Editors: Well-being The foundations of Hedonic Psychology, NY, Russell Sage Foundation, 2003
2. 大坊郁夫: Well-being を目指す社会心理学の役割と課題, 対人社会心理学研究, 9, 1-32, 2009
3. Carmel S, Raveis VH, O'Rourke N, *et al.*: Health, coping and subjective well-being results of a longitudinal study of elderly Israelis, *Aging Ment Health*, 21(6), 616-623, 2017
4. Zhao F, Guo Y, Suhonen R, *et al.*: Subjective well-being and its association with peer caring and resilience among nursing vs medical students A questionnaire study, *Nurse Educ Today*, 37, 108-113, 2016
5. Werner S, Shulman C.: Subjective well-being among family caregivers of individuals with developmental disabilities the role of affiliate stigma and psychosocial moderating variables, *Res Dev Disabil*, 34(11), 4103-14, 2013
6. Zhang JP, Yao SQ, Ye M, *et al.*: A study on the subjective well-being and its influential factors in chronically ill inpatients in Changsha, China, *Appl Nurs Res*, 22(4), 250-257, 2009
7. Zhang JP, Huang HS, Ye M, *et al.*: Factors influencing the subjective well being (SWB) in a

- sample of older adults in an economically depressed area of China, *Arch Gerontol Geriatr*, 46(3), 335-47, 2008
8. Chalise HN, Saito T, Takahashi M, *et al.*: Relationship specialization amongst sources and receivers of social support and its correlations with loneliness and subjective well-being a cross sectional study of Nepalese older adults, *Arch Gerontol Geriatr*, 44(3), 299-314, 2007
9. Rask K1, Astedt-Kurki P, Paavilainen E, *et al.*: Adolescent subjective well-being and family dynamics, *Scand J Caring Sci*, 17(2), 129-38, 2003
10. Katja R, Päivi AK, Marja-Terttu T, *et al.*: Relationships among adolescent subjective well-being, health behavior, and school satisfaction, *J Sch Health*, 72(6), 243-9, 2002
11. 上出寛子, 大坊郁夫: 日本における wellbeing を高める動機づけ, *対人社会心理学研究*, 12, 143-148, 2012

Subjective Well-being in the Field of Nursing; Review of Literatures.

Emi Kajiwara

Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department of Nursing Division of Basic Medical Sciences and Fundamental Nursing

Kanako Nakamura

Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department of Nursing Division of Support Nursing

Yoko Suenaga

Fukuoka Nursing College Faculty of Nursing Department of Nursing Division of Support Nursing

Key Words well-being, subjective well-being, Nursing, literature

【Introduction】

There is a well-being as an important concept to think about human life. Well-being has been studied since the 1980's and has been discussed for well-being from various aspects. In addition, in subjective well-being, Daibo stated that "well-being is an indicator of living adaptation and should be a goal," and supports the aiming of that person's life for well-being nurses. I think that well-being is also important as a concept of quality of nursing.

【Purpose】

We will organize the documents using subjective well-being in the field of nursing.

【Methods】

The literature database used PubMed to collect literatures. Search expression is 'nursing' and 'SWB'. We extracted subjects using subjective well-being (SWB) from the retrieved documents, and organized the reported year, subjects, and their contents.

【Results】

There were 35 documents published in search formulas. Among them, there were 8 articles using subjective well-being (SWB). Looking at the reported year, every 5 years, there are 2 reports in 2000-2005, 3 reports in 2006-2010 and 3 reports since 2011. The subjects of the SWB evaluation were one caregiver, 3 elderly persons, one case of inpatient, one medical student and 2 junior high school students.

【Discussion】

Due to the wide range of research subjects, the possibility that it is a wide scale of application range to evaluate subjective well-being without specializing in specific field was heard. From the fact that the first paper is 2002, it was confirmed that it is a relatively new concept, and the number of reports is small, but the papers have been continuously published. We will continue to keep up with the trends and get suggestions on the usefulness of well-being.